
騙し・騙され・騙し合い

紅ノ芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騙し・騙され・騙し合い

【Nコード】

N9372P

【作者名】

紅ノ芽

【あらすじ】

ある高校に通う普通の男子高生と女子高生がいました。

いたって普通の振る舞い、でもそれは真っ赤なうそだった!?

幼い頃から女装ばかりさせられてきた、お淑やか（ひ弱）で髪の長い（ハサミ恐怖症）な男子…瑞樹^{みずき}

昔から男勝り、付いたあだ名はガキ大将、とりあえず不良に憧れ男装趣味の女子…未智^{みさと}

二人が繰り出す馬鹿馬鹿しいような騙しあい。

(前書き)

某ゲームをしているときにアイデアを思いつき、それをそのまま勢いで書いたものです。

短編小説ですが、まだ完成したわけではないので、このページにどんどん更新していきますので、ご了承ください。

変なところとかありますが、よろしく願います。

2011/11/15 「数日後」以降を更新しました。

追伸ゝ短編と書かれてますが、たぶん長編になっちゃいますのであしからずです^^;

久しぶりに書いたので変なところとかあると思います、あったらお構いなくコメントしてくれるとありがたいです。

「おっはよう!」「おはよう、ミカ」「おはよ、ミカ」ミカというらしいその子は、教室に入ってきてすぐ友達と挨拶を交わした。今はまだ始業のチャイムが鳴っていない時間帯。

勉強している人もいれば友達とだべっているやつもいる。

『これが高校生らしい教室の雰囲気・・・なのかな?』

今いるここからは、このコンクリの箱が隅々まで見わたせる、単に窓側で一番後ろってなだけけど。

『・・・・あ、また誰かが教室に入ってきた。』すぐ気づく、なぜか、俺の目は自然と入口に向けられていたからだった。

今日はとうとう入学式・・・、お先真っ暗、早速登校拒否したい。

何でかって言われると、理由はただ一つ、クラスメイトの視線。

さっきから俺に突き刺さる。

かなり痛い、精神的に。

“あいつ、かわいくねえ?” “ねえねえ、あの子どこ出身なんだろう?” 適当な男子女子が一人、そう言う。

“さあ?でも綺麗よね・・・。” “・・・俺、後で告ろうかな” “やめとけて。・・・玉砕すんぞ” それから続いて、さっきの女子の隣にいた友達、さっきの男子の両脇二人が喋る。

“いいんじゃない?死んで来い!!” “なんかさ、気取ってるって感じで、ちよっとむかつかない?” “ぼっちりと親指を立てる男子、金髪のちよっと怖そうな女子。

色々な話が耳に伝わってくる・・・、悪い話ばかりではなさそう。ちよっと安心したけど・・・、やっぱ無理があるってこの服。まずスカートってどうよ!?・・・まあ慣れちゃってるからなんてこと無いんだけど。

でも、そんな自分が恐ろしい。
しかも人生初で化粧まで、薄く薄くって母さんには言われたけど・
・。

『何でこんなことが俺の人生に必要なんだよおお。』

ここは至って普通の町の至って普通の高校、県立明翔高校。
その1・4組、それが彼の高校生活最初のクラス。

彼の両親はとにかく息子ラヴ、モットーは『かわいく凛々しいお姫様』。

息子なのにお姫様って・・・、まあ顔が女の子っぽいからなんだろうけど。

そのせいか、生まれてから数えるほどしか髪を切りにいったことがない。

いつも髪は母親のナオミさんが丹精込めて綺麗にしています。

そして小学校からずっと父親のミキオが送り迎えをしています。

小学校からそんなだったから、いじめられたりしたこともある。

でも、それも数えるほどでしかない、だって彼、かわいいんだもの・
・。

先生からも男子からも女子からも惚れられる始末、友達は異常な数だったらしい。

さらさらと流れるような漆黒の髪、顔形スタイルともそれは抜群で他校まで噂が行くほど。

見つめられたら魂を抜かれるような澄んだ茶色の瞳、陶器のような真っ白な肌。

その他諸々が学校新聞に一面でのっかる、しかも毎回・・・、厭きれる程に。

そんな彼は今から初々しい高校生活をおっぱじめ様としていた！

とうとう始業のチャイムがなる、先生来る、挨拶して連絡されて廊下に並ばせられる。

・・・中学校時代はいつもそう、でも今回は廊下に並ばされる前に先生から面白い報告があった。

「ええと、いつもならこのまま廊下に並んでもらうんだけど、一個だけ言うことがあるんだ」

それだけで歓声上がる、俺もちよつと気になった。

ひよろひよろな男性教員が、周りのうるささお構いなしで話を続ける。

「今日は後で来るんだけど、もう一人、男の子がこのクラスの仲間になるからよろしくね！」

「はぁーい！」俺以外の全員で手を上げ返事をする。

おいおい高校生、どうしたんだよ。

ため息がふうと出てしまった。

そして呟く、「ふふ、意外と面白そうですね。高校生って」まあ俺、男だけだね。

退屈な入学式が目の前で披露されている、特につまらないのが校長の話あるものを一番最初に話題に出しそれについてちよつと語った後、本当に言いたかったことを数言で言いステージを去る。

ここまで来るのにやく10分以上もかかる、ホント聞くに堪えない話・・・。

こういうのは寝てしまいたいけれど全く睡魔がいらっしやらない、母親との『女の特訓』で睡魔は撃退されてしまったんだろう。

でも座っているのは全然苦じゃない、背筋を伸ばして背もたれに寄りかかり頭をおくたったそれだけで疲労感がないのだ、たぶんこれも特訓の成果なんだろうなとしみじみ思う。

暑苦しかった入学式が終わるとようやくコンクリの箱へ戻された、

窓を開けてばれない様にスカートでひらひらと中に風を送り込む、じわっと汗をかいた股やらお尻をすっとしたものが通り抜けると気持ちよさが全身に走った。

その時ガラッと教室のドアを開け教師が入ってくるとクラスの雰囲気^{雰囲気}がわっと一変する。

ドキドキ、そわそわ、色んな擬音語が見えそうな空気が教室を充満させる、先生からの連絡は俺以外の誰にも伝わってないんじゃないかと思うほど皆目を輝かせている。

『きつと“あれ”を待ってるんだろうなあ、まあ俺も見てみたいけどね』そう、“あれ”。

“あれ”とは後で来ると言っていた男の子、容姿や性格が気になるのだろうな。

女子はきつと顔が良かったらまずストライク圏内に入り、さらに頭が良いとか運動が出来るなんて言われると目を皿のようにしてそいつを眺め、色々計画するんだろう。

「ええ？全然興味ないよお」なんていつてる奴が実は一番気になってたり……こんな感じかな、女子の感覚って。

まだ良くわからねえや、はは。

「それじゃ、お前らのお待ちかね、もう一人のクラスメイトを紹介する。入って」教師がそう声をあげるとまた教室のドアがガラッと開き若干茶色がかった短い髪の毛をした男が入ってきた。

顔かたち良し、ものすごく美形と呼ばれるほどじゃないのかって程だ、早速甘いため息がちらほら聞こえてくる。

先生がいたって普通の字で書いた名前は“天祢^{あまね} 未智^{みち}”だった。

そして言う「じゃ天祢、自己紹介」先生は手を座っているクラスメイトに向けると彼を見た。

一回頷いた彼は「初めまして、天祢です。よろしくお願いします」たったそれだけのことで女子からはいらないほどの大拍手が彼に飛

んで行った。

一応俺は男なので普通の拍手を送った、席は俺の隣と先生が決め、晴れて入学式が幕を閉じた。

次の日早速机を運んできた女子軍団は俺の隣をがつつり占領していた。

中学の頃から俺は毎朝8時には学校にいる、それより早い奴は大体真面目君か真面目の振りした根暗君と言う勝手な定義があったが、これであっけなく覆されたことになる。

天祢はクールに決め女子からの熱烈ラブコールに一言二言で応えていた、がいきなり立ち上がり携帯の画面を見ると「用事あるから・・」
・」と言いつつ教室を去っていった。

女子軍団から文句が出るのかと思われたがその逆で黄色い歓声が小さく上がった。

それを見ていた“ぶっちゃけいくな男子”たちがこっそりと天祢に対しての文句をたれた。

やつが戻ってきたのは朝のSHRの時だった、涼しい顔してゆたったりとした足取りで席へ着く。
ショートホームルーム

それから一時限目が始まり先生が自己紹介してそれから授業に入った、無駄に真面目そうな人だったので質問タイムもなしで教室の空気が悪くなる。

そしていきなり英語教師、通称“ぽによ（木下）”が授業準備点検を始めた。

なぜ“ぽによ”かと言うと背が小さくてお腹が出てて更に頭のパーツ全体がそっくりだからだ。

この日の授業終わりから悪がきが命名することになる。

話は戻り点検、それで噂の天祢がまさかの教科書を違う方の英語と

間違えた、こっちはライティングで彼が持ってきたがリーディング、これぐらいのお茶目なら許せるだろうと思ったら全くダメ。

ぽによは彼を怒鳴り俺に教科書を見せてもらおう言うと言前へ戻っていった。

仕方なく机をくっつけ真ん中に教科書を置く、授業に入ると女子からの目線が酷く痛かった。

そんなこんなで2、3、4と授業が過ぎていき高校生活初めての昼休みが始まった。

2時限目の先生は優しそうな女性古典教員、3時限目は有無を言わせぬオーラを全身から放出している男性数学教員、4時限目はほんわかった空気を作り出す男性音楽教員だった。

4時限目の授業は選択教科といって、各々が入学する前に音楽・美術・書道の3つのうちから希望する芸能教科1つを選択して受けられる授業のこと、俺はあまり絵がうまい方じゃないし、かといって書道のような堅苦しい空気も嫌だ、そうなるかと消去法からして音楽ってわけ。

『やっぱり最初は高校でも同じか』なんて思ったのは自己紹介のことで、小学校でも中学校でもやっぱり最初にやらされた記憶がある、目立ちたがりもしくは格好つけはここで存分にアピールする。

俺はそんなに目立ちたがりで無いので無難な挨拶をクラスメイトにする、小学校からずっとそうで高校になった今もなんら変わりなく・・、いや“女”としては今日が初めての自己紹介か、たぶんなんでもなく普通に出来ていただろうなあ、たぶん。

そしてまあ今に至るけども、朝にもまして人の目線が突き刺さっているのは気のせいか、なんだか通常日程初日から先が思いやられる状態だ。

このまま黙っていても昼休みは終わってしまうので、仕方なくカバンから弁当箱を取り出すと俺は昼飯にかぶりついた、今日の昼飯はサンドウィッチだからたとえ女としてもかぶりつくで正解だろうよ。1つ食べ終わったところでおかずの方へ手を伸ばす、ずっとお弁当作りたくてうずうずしていた母親だけある、彩りや味は素人の俺から見るともうプロ並み、別にマザコンってわけじゃないホントに。そんな料理たちを半分ぐらい食べ終わったところでブレザーの右ポケットがぶるぶると震えだした、手に持っていたフォークを置いてケータイを取り出すとディスプレイには母親の文字が光っていた。メールだ、内容はまあ大体予想してた通りのものですがすぐにケータイを閉じると昼飯に戻った。

その時、「うわあああああ、・・・またかよ」前の席ではしゃいでいた男子がものすごい勢いで後ろに反ってきて俺の弁当に野郎の手が侵入した。

「・・・え？」冷たい感覚と妙に柔らかい触感がしたんだろう、上半身えびざり野郎はゆっくりと黙って元の位置に戻ると頭に当てていた手を顔の前に持ってきた、右手はやけにつやつやして左手はパンのくずが所々についている。

突然何が起こったのかわからないそいつの友達は全員頭上にクエスチョンマークを浮かべ、手を眺めている野郎の後ろをチラッとみるとそこにはこのクラスの女子NO.1、黒須^{くろす} 瑞樹^{みずき}さんが固まっていた。

手を見ているやつ以外は何が起こったかすぐに理解して慌てふためき「すぐ謝れ、すぐの方がいいと思うぞ」とか「後ろ見てみろって後ろ！」目線で促したり「何でもいいから、とにかく購買まで走って来い・・・」ため息をついたりした。

そこまできてようやく理解したんだろうすつと後ろを向き「ごめんなさい」と精一杯の一言を言ったのでしようがなく「いえ、大丈夫ですよ。・・・実はもうお腹一杯だったので仕舞おうとしてたんです」なんて嘘を満面の笑みで口から出した。

それでもまだ暗い顔をしてるので『ちっ、めんどくせーな。後味が悪いっての』そう思いながらも「代わりのものとか買ってこなくて良いですよ、本当にお腹が一杯で。もし買ってきてもらっても無駄になってしまっただけですの」そうつけたした。

するとさっきまでの罪悪感たっぷり顔が嘘のように、ニヘラつと笑って「ありがとうございます！」自分の椅子に座った。

『おいおい、もうちょつと残念そうにしてろや。はあ・・・俺の腹はあと二時間持つのかこれで』名残惜しく弁当を仕舞うと気晴らしに教室を出た。

教室を出てからは特にやることがない、とりあえずの感覚でトイレに行くことにした、ああもちろん女子トイレね。

最初は戸惑ったよ、だってあるところには疑似流水音ボタンがついてるんだから・・・、音を聞かれたくないのはわかるけどここまでするとは知らなかったんだよな。

やり方は母親のナオミさんに聞いて、今では難なく使いこなせるまでに成長しました！・・・わかってるよ、自分が男だってことは。

この高校にもきちんについていた、なんだかんだで今まで使ってたわけだから、今となってはこれがないと困る、あとあって欲しいのはウォシュレットかな、うん。

すぐさま用をたす、洗面台まで来て誰もいなかったら手を水で濡らして終わるけど、たまたま女子が2人鏡の前で髪の毛をいじいじしていた、仕方なく手をきちんと洗って便所をでた。

歩幅を小さくして歩きながら、どこに行こうか考える・・・、『腹減ってるから、食堂でも行こうかな?・・・いや、今行ったら逆に目立つか、あと20分しかない。んゝ・・・あ! そうだ、購買行って飲みもんでも買ってこよう。水分で腹を満たすのは気が引けるが、しょうがない』そうと思ったらすぐ行動。

階段を下りて購買を目指す、すれ違う人すれ違う人みんなこつちをチラ見してくるが気にしないふりして進んだ、本当は気になるんだけどね、そこはほらお淑やかにいかないと! キアラ作らないと!!そして無事に購買に來た俺は、自販機の前で固まってしまった、『やべえ、細かいの忘れた。万札しかねえよ!』財布に手を突っ込んだまま自販機の前にいる俺、そんな時後ろから声がかかってきた。

『どうしたんだ、買わないのか?』そうイケメンボイスで話しかけてきたのは、同じクラスで隣の席の天祢だった。

「あ、いえ。今お財布を確認したら1万円札しか入ってなくて、買おうかどうか迷っていたところなんです。邪魔になってしまいましたよね、すみません」となんとか平然を装った声を出し天祢に応えようと、「そうか、でも邪魔ではなかった」言いながらポケットから財布を取り出す、男物のそれには絶対女の子物だろという“あるキヤラクター”がキーホルダーとしてくつついていた。

『え?・・・?』さすがに二度見はしなかったが、なぜか無意識に顔を彼のキーホルダーに近づけていた、『だって○キュアじゃね、これ? しかも初代だ・・・。なんだこいつ、俺と気が合うかもしれない。ってかそれよりも、なんでこいつがこんなものつけてんだ?』そんなこんなで考え事をしている俺をよそに、彼はペットボトルのスポーツドリンクを買っていた。

ピッ! ガシャコン! と飲み物が落ちてくる、彼はゆっくりしゃがむと髪を左耳に髪の毛をかけ飲み物を取った、両足は揃えたままゆつたりと取った、しかしこんな綺麗な光景を俺は見えていなかった、というよりあの○○キュアのキーホルダーが気になって、脳内世界から現実世界に戻ってくる気にならなかった。

天祢が立ち上がったあたりで、黒須はリアルへ戻ってきた、そしてすぐ質問をした、「あの、少し気になったのですが、もしかして○キユアが好きなんですか？」すると彼は驚いた表情のまま固まり、数秒間動かなかった。

その間が終わると彼は震えるプルプルの唇でこう言った、「・・・あ、妹がつけてそのままでったんだな、うん。今まで気づかなかった」目が泳いでた、「そうなんですか、かわいい妹さんですね。私は一人っ子なので羨ましいです。・・・あ、もうすぐ予鈴ですね、ごめんなさい、私はこれで戻りますね。また教室で」10万ドルの営業スマイルをかまして俺はその場を立ち去った。

実際、予鈴が近いのは本当の話、だからちよっと急ぎ目に階段を上って教室に向かった。

5・6時限目は、社会、髭の生えたおっさん先生だった。

2時間も何するかというと、1時間は通常授業、もう1時間は教材を見たり、その内容についてのレポートだったり、図書室で次の時間までの資料を集めたりという時間になっている。

その授業もテキパキこなし、ついに念願の放課後を迎えた、片手で口元を抑えながらあくびをし、鞆に教材をまとめるとゆったりとしながら、でもそれでいて内心ものすごく急ぎながら教室を後にした。下駄箱の中に上靴をいれようとした瞬間、ある紙が目に入ってきた、まさかの高校生活1日目にしてラブレターだった、『まじかよ！』心の中はパレードが沸き起こる、だがしかしよく考えてみると俺は今女子、ということはほぼ必然で差出人は男子、刹那でパレードは百鬼夜行へ姿を変えた。

うんうんと迷っていると、また声をかけられそうなのでとりあえず鞆につっこみ学校を出たのだった。

学校をですぐ、俺は父親のミキオさんにメールを送り近くにあるコンビニに足を運んだ。

中学校までは教室で授業が終わった瞬間にメールをし、迎えに来てもらってたが、今日はあの週刊マンガ誌が発売される日だったのでそれをしなかった。

やっぱり直帰できる状態でどっかよって帰るのは面倒くさくてしょうがないわけ……。せっかく車なんだからと思うやつもいると思うけど、俺は嫌なんです、まじで。

てくてく歩き何の気なしにコンビニに入る、ここまではいつも通りだった、でも今日はなんだかいつもと様子が違っていた。

そう、18禁コーナーの隣にあるマンガコーナーにいつもおいてあるはずの週刊マンガ誌がなかったのだ。

『まさか……。いや、ここから見えないだけかも』そうちよつとした期待を持ちつつそこへ近づいていく、何でもないようなふりをしてそこを通り過ぎる、『……。現実残酷だなあ、ほんとにねえや……。』飲み物の前を通り過ぎ、おにぎりの前を通り過ぎ、何も買わずコンビニを一周して外にでた。

店員は怪しそうに、「あーと、っあしたあー」と言っただけ俺を見送った、しょんぼりして駐車場へ行くとそこにはもうミキオの車が止めてあった。

せっかくのやる気充填物をそがれた俺はだらだらと車に乗ると、「・・・本屋」むすつと一言だけ呟くとミキオさんは黙って車を走らせたのだった。

家に帰ってくるとさっそく母親のナオミさんが、「おかえりなさい、みっちゃん。初授業はどうだった？あ、ちゃんとトイレはつかえた？トイレトーパーきちんと三角にした？気に入った人、見つけた？」口を開けば質問を言うびっくりな状態だった。

せっかく本屋にひとつだけあった週刊マンガ誌を腕に抱えうきうき

して帰ってきたというのに、こんなんじゃない気分が台無し、階段を上がりながら下から呼びかけてくるナオミさんに対して、「あとでね」と言っただけ自分の部屋に戻った。

鞆を投げおき、服を脱いでベッドへダイブする、今日は初日のくせに妙なイベントが多すぎた、昼飯事件を皮切りにキーホルダー事件、そして極め付けがラブレター投下事件・・・。

あ、そうだ、ラブレターもらったんだった、忘れてたよ、すっかりと・・・、俺は体を起こし鞆を取りに行く、ベッドに座ってから鞆を開け中から投下された例のブツを抜き取った。

適当に破り中身を出すとベッドにうつぶせになって手紙を読んだ、

『拝啓、黒須瑞樹様。』

初めまして僕は、1年2組の林 郁斗と言います。

いきなりこのような手紙を送ってしまい申し訳ありません。

単刀直入に言わせていただきます、僕はあなたのことが好きです。

入学式の時に見たあなたの優美なお姿を見て以来、ずっとあなたのことを考えていました。

短い期間ではありますが、自分なりにきちんと考えた結果、あなたにこの想いを伝えることにします。

きちんと自分の口からもう一度伝えたいので、明日の放課後、学校の屋上で待っています。

敬具
『

『へー、意外とまじめな文だね。』しかし、一目惚れしてきたかあ・・・、ちょっとうれいのかも・・・いやいや、そんなことは置いて、やっぱりきちんと断らないとな。俺はそういう趣味はないっ

て。あ、学校じゃ女か、んで普通に断ろう、うん』ふうと一息吐き出して手紙を机に置く。

それから夕飯までぐっすり眠り、さっさと飯食って風呂入ってくそして寝た。

そして、次の日、おれは放課後まで難なく学校生活を過ごし、屋上へと向かっていった。

ガチャッと屋上への扉を開けると、今まで薄暗かったせいか太陽の日差しに目が痛くなる。

上を見上げた後目を細めまっすぐと足を進める、後ろ手に扉を閉めてトントんと、強めの風にさらわれる髪を手で押さえ目の先にいる人物を見つめた。

彼が昨日手紙をくれた人だろう、それ以外に人がいないんだから。

「あなたが林 郁斗くん？」俺はスカートと長くなった自分の髪を抑えながらその人に訪ねる。

「あ、はい！」頬を赤くしながら緊張した大声を出す林、それに付けてうんうんと結構な勢いで首を縦に振る。

あっちも緊張してるかもしれないが、俺も緊張してるんだ、……

・・・そういった趣味はないぞ。
ただ、俺は今女だし言葉を選んで断らなくちゃいけないから、それで緊張してるだけだ、うん！

お互いの名前を個々が理解してところで会話がぱったり途絶える、聞こえるのは耳にざわめく風の音。

『こりゃ〜長くなるかもな。はあ、ミキオさんに連絡しといてよかった。てか、意外とかわいい顔した男だなあ。こういうのをジャニ系とか童顔って言うのかね』その間も目線は林に向けたままの黒須。もし秒針の音が聞こえてたらきつと100回ぐらい数えていただろう、それから架空の秒針音を数えて20回ほどで彼が動き出した。

顔を上げてこちらをむき、「あの！ここに来てくれてうれしいです。手紙でも僕の気持ちは伝えましたが、……僕はあなたのことが好きです！」直立の郁斗。

すーはーと深呼吸をしてからまた言葉を発した、「僕と……僕と、付き合ってください！！」ようやく目的のものが出てきたの確認してから黒須は答えを言うまでの間を強制的に空けた。

『えーと、たしかメモによれば10秒ほど数えるんだったよな。ふう、あと3秒。……よし』準備が完了し、黒須は彼に向かってあの言葉を言った、「ごめんさんさい」さっと頭を下げて顔を見せないようにする、これもメモ参照。

それからまたの静寂、今度も彼がそれを打ち破る、「……わかりました。手紙読んで、ここまで来てくれてありがとうございます」そう言いながら彼は無理な笑いを浮かべる。

黒須は何も言わずに屋上の柵の所へ歩いていった、それを見た彼はゆっくりと屋上から出て行った。

「はあー、まじ緊張した」独り言を柵の向こうに投げる、緊張で凝り固まった首をコキコキ鳴らしていると、「黒須？」いきなりの名呼びにびくっとして後ろを向く、そこにいたのは天柰だった。

「あ、いえ、ちょっと用事があった」さっきの告白を隠すように喋ると、「そうか」素気ない答えが返ってきた。

『もしかして、悟られたか？まあ終わったことだしな、いいか』そう思いながら黒須は天柰に質問をした、「そういえば、天柰くんはどうしてここに来たのですか？」天柰の答えは「風に当たりに来ただけだ」だった。

「さっき帰ろうと思ったんだが、誰かが来てて帰れなかったんだ」続ける天柰の言葉に黒須は『まじか、こいつずっと屋上にいたのかよ。んじゃ聞いてたのか？あれ』と、心で思い「そ、そうだったん

ですか。へー」と苦しい笑い顔で答える。

本音言うと天祢はずっとさっきのやり取りを聞いていた、屋上にある小さな建物の陰でぼーっとしてるところに黒須らが来たのでそのままそこに隠れていたのだ。

すぐ帰るだろうと思ってたらいきなり大声で好きだと言うもんだからどうしようもなくなりその場で小っちゃくなっていた、それで扉の音がもう一度したのを聞いた天祢は安堵のため息をついてでてきたのだった。

そんな本音が黒須に気づかれたのか、二人の間にはものすっごく気まずい雰囲気が漂い出した。

どっちもどっちで何もできずに手をすりすりしたり、制服を指先でいじったり、髪の毛をいじったり。

『これは感じ。どうにかしねーと、このまま別れるのはもつと気まずいぞ、俺!』、黒須は何とかしようとして口を開くととっさに思いついた言葉を声に出した、「あの、今度遊びに行ってもいいですか?」わけがわからなかった。

テンパった黒須が使ったのは、言葉こそ女の子だが昔懐かしい男姿のところに編み出した困った時の常套句だった。

失敗したと思った時には後の祭り、顔は真っ赤に染め上る黒須、そのままうつむくと『やっちゃまったー!』。どうすんだ、これ。何とかしようとしたらもつと酷くなってるぞ』心で叫ぶ。

天祢はその質問に戸惑いを隠せないでいた、でもここを何とかするには返事をしなければならぬと思うと、「いい、別に」目をどこかにやりながら喋る。

「・・・んじゃ」と言って彼は屋上を去って行った。

それから数秒して奇声を上げると黒須は何事もなかったように屋上から姿を消した、『あー、何やってんだまったく!でも、OKするって天祢もどこか抜けてないか?あ、そういえば、いつ行っていないか聞いてないや』若干の笑顔で階段を下りたのだった。

数日後の良く晴れた土曜日、黒須は天祢に指定された駅の改札入口で待っていた。

もちろん、恰好は女の子・・・。

道を歩いてるリーマンがよくちよくこつちを見てくるがぼつちり無視をする、携帯で時間を確認しながらハアとため息。

『・・・早くこねえかな、もうそろそろ約束の時間なんだけど』約束の時間は a.m 10:00、ただ今 a.m 09:52。

『まさか時間ぴったりが好きな人か？もしかわ、平気で遅れてくるやつか？・・・それはないな、あいつに限って』春の風が足元をすり抜ける度、黒須は背中をブルルと震わせていた。

それから7分が過ぎ、残り1分となった時、駅前の横断歩道に見覚えのある顔が現れた。

そいつはものすごく慌てており、額にじんわりと汗を浮かべているのがここからでも光の反射でよく見えた。

あっちも俺の姿を確認したらしく、仕切りにこちらを見ては申し訳なさそうな顔をする、それがなんだかおかしかった。

「ハアハア、すまん。遅れてしまった」着崩した格好の天祢がなんとか肩で息をしながらこちらに謝る、「いえ、大丈夫です。ほら」そう言っただけ俺は携帯電話を見せると「時間ぴったり。ぎりぎりセーフですね」営業スマイルをかましたのだった。

そりあえずこれはこれで置いておくことにして、さっそく天祢の自宅へ足取り遅く向かった。

駅からは徒歩10分程度の近場、閑静な住宅街に差し掛かって1分ほど、そこに大きな家がそびえていた。

門替えがまず立派、うちとは比べようもないような家だったことは確か。

そこを軽々抜けると家の入口まではすぐだった、「どうぞ」その言

葉を聞いたのち彼のあとについて「お邪魔します」挨拶し中へ入った。

家の中は・・・言うまでもないな。豪華だった、すごくシャンデリアとかね。

「こっち」と言われ通されたお部屋は確実に俺んちのリビング以上の広さを持つ客間だった、どうしても部屋には見えない、そう間^まだったわけ。

適当な椅子に腰かけると「んじゃ、お茶持ってくるから待ってて」天祢が扉から上半身だけ出して言う、「ありがとうございます」そう言った俺はその言葉を彼に届けたわけではなかった。

部屋が広いと天井も高い、どうしても反射するのか試したくなる、そのための返事でもあった。だから少々大きな声で言っていたのは内緒だ。

跳ね返りはほとんどなく、吸い込まれるように消える。

そのせいか若干うきうきが減った気がする、何せ男の俺としては跳ね返ってくれる方が楽しいのだ、性別忘れて大声出して遊びたかった。

何とか堪えながらも独り言は呟いていた、「すっげー広いなあ・・・」こんな部屋家に欲しい、歌うたっても親にばれなさそうだし」呟^{ささや}いてる間中脳内では好きなあの曲がずっと再生されており、いつでも歌いだせる状態だった。

無意識で鼻歌に乗せていると扉が開き天祢が戻ってきた、「何歌ってるんだ？」まさかの質問にびっくりしつつも「私の好きな曲なんですけど、“天城越え”って知ってます？」そう応答すると「ああ。演歌だっけ？よく知らないけど、サビの部分ならわかる」一般的な回答が戻ってきた。

ですよねーなんて笑いながら黒須は失敗したと思った。

何せ相手は普通の高校生、こっちもまあある一点を除けば普通の高校生だが、彼の場合祖母の影響が激しいので、まったく言っていないほど最近の音楽事情を知らない。

だから、中学での友達（もちろん女の子）との会話ではカンペが必要なほどだった。

でも、今回相手は男子、そこらへんは詳しく聞いてくることもなく、さっきの会話がなかったかのようによに目の前にお茶を置く天祢。

とりあえずは助かったと思う黒須、しかし実は天祢の手はプルプル震えていた、特に緊張でもない、そうさっきの演歌の話のせい。

でもやっぱり気づかれることなく5分ほど過ぎたとき、「んー、うちなんにもないけど、ゲームでもする？」気まずい雰囲気を先に耐え切れなくなった天祢がこう提案してきた。

「そうですね、そろそろ天祢さんの呼吸も落ち着いてきたころですし、遊びましょうか」大人の対応をして彼と遊び始めたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372p/>

騙し・騙され・騙し合い

2011年11月17日20時54分発行